



小島烏水全集

第十二卷

大修館書店

小島烏水全集 第十二卷 (第十四回配本)

定價九八〇〇圓

昭和六十二年八月二十日印刷

昭和六十二年九月十日發行

著者 小島烏水

發行者 鈴木莊夫

印刷者 山田隆

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三一二四

電話〇三(二九四)三三二一(代表)

T 101 振替(東京)九一四〇五〇四

ISBN 4-469-19092-6

ISBN 4-469-19090-2

第十二卷 目次

山の風流使者

凡例

藤島敏男

三

序

風流漂泊の第一歩——東海道

九

心を鍛へる草鞋の旅

一六

歐洲アルプス最初の邦人登山者

二五

ヘットナア石を繞ぐりて

三〇

「續スウイス日記」發掘の始末——附『スウイス日記』の由來

四

四松庵の山の會——山旅の人々の群像

四

山の畫家茨木猪之吉

六

中村清太郎君の『山岳渴仰』

空

邦譯『日本アルプス』の卷後に

六

或一冊の古本

『飛驒遺乗合府』のこと

登山家マムと日本山岳會の人々

「木曾街道」への美的散歩

〈追 補〉

山の因縁五十五年

一、山岳會創立の前後

二、山戀ひ

三、明治三十五年の槍ヶ岳登山

四、初めての穂高飛驒側・白峰等

五、ウエストンとの交友

六、一路進行、山岳會の創立へ

七、「山岳」創刊——博物會の人々

八、地理學者の一群

九、山岳會と美術家

一〇、各大學及各地方の山岳會誕生

三三

七

八

五

二〇

二〇

二三

二四

二七

二八

三三

三三

三六

三〇

三〇

阿佐谷文草

- 一一、故人を偲ぶ——木暮理太郎氏と辻本満丸氏 一三三
- 一二、日本アルプス探検時代の區切り方 一三四
- 一三、私の山の早期著作に就いて 一三六
- 一四、私の登山閱歷 一四〇
- 一五、早期の山案内人としての獵師銘々傳 一四四

阿佐谷文草

- 一葉「たけくらべ」の原稿料 一六一
- 『明治文學逸話』の人々 一六二
- 北村透谷未亡人 一六六
- 『明治文學逸話』の人々（その二） 一七五
- 「たけくらべ」の原稿 一七七
- 板垣退助伯と西歐文豪の會見 一八〇
- 正岡子規の「墨汁一滴」等 一八六

小説「春」に現はれた一葉女史	一八
森鷗外の手紙	一九
或署名本	二〇
徳富蘆花の一葉女史講演	二一
旅順の乃木將軍	二二
藤村おぼえ書き	二三
山田美妙の比律賓獨立戰話	二四
森鷗外と大下藤次郎	二五
大和民族の書籍『日本風景論』	二六
河井醉茗『詩と詩人』	二七
獨語——『山谷放浪記』序	二八
私の山谷放浪	二九
日蓮上人の消息に見えた白峰	三〇
泉鏡花の山岳小説	三一
鎗ヶ岳と槍ヶ岳・雙六谷と双六谷	三二
山と人の素描	三三

お札博士スタイルの日本に對する警告

『山岳文學』序

本邦の山岳文學（ラヂオ講座）

本邦の山岳文學

本州中部・陸奥・北海道の深山幽谷を跋涉したる藝術僧圓空

過ぎにし旅のことども

立 山

立山連峰の記録（アンケート回答）

越中山川譜

「靜かに見れば……」の句は芭蕉の一句

芭蕉の旅と句碑

雅號の由來（アンケート回答）

山中湖より

草鞋とモンペ

木暮君の山の仕事

三〇〇

三二八

三三一

三三五

三六三

三九二

四〇〇

四〇一

四〇三

四〇五

四一〇

四二二

四二五

四二五

四二七

山へ歸らう——日本山岳會の復興と再生

四二〇

芝居見物昔話——歌舞伎座と團十郎

四二五

「越後山岳」と高頭式君を結ぶ

四三八

槍と穂高

四三一

*

そごろごと

四三三

『扇頭小景』

四三四

關含忍坊氏のこと

四三八

ウエストン書翰の解説

四五〇

横濱より

四五三

『漫畫一年』より

四五四

寫樂の似顔畫

四五六

昨年 of 藝術界に於いて (アンケート回答)

四六三

予が生ひ立ちの記

四六四

米國加州に於ける自然美の保護

四六五

「文庫」加評文

明治三十年

明治三十一年

明治三十二年

明治三十三年

解題・解説

近藤信行
六二

四七

五五

五四

五四

山の風流使者

凡 例

凡 例

- 一 この書物は一九四八年初夏、舊稿に補正加筆したものと新稿とを著者自ら編み、題名カット等を選んで上梓の筈であつたが、いくばくもなく病床に就いて遂に再び起たれなかつたために遺著となつた。
- 一 本書の新稿はもとより舊稿も、著者の既刊單行本には收められなかつたものである。
- 一 卷末補遺「山の因縁五十五年」は、一九四七年秋口述筆記を著者が殆んど書改めて「山と溪谷」誌に掲載されたが、本邦登山史上逸し難い文献と思はれるので、同誌の諒解を得てこゝに収録した。
- 一 著者の風格を傳へるべく、故人と最も親しかつた中村清太郎氏と、嗣子小島隼太郎氏の執筆を乞うてこれを巻尾に收めた。
- 一 「鳥水小島久太年譜」は中村清太郎氏の作成に係るものである。
- 一 五十年間に亙る著者の永い文筆生活の所産の内、單行本として刊行されたものゝ目錄を掲出した。
- 一 カットは中村清太郎氏、外装は佐藤久一朗氏の筆になる。巻頭の遺影は昭和十四年末、著者六十七歳の折のものである。
- 一 圖案として扉に掲出したエツクス・リブリスは『日本アルプス』第一巻及び第三巻より轉載。意匠は織田一磨

氏、佐藤久一朗氏の手彫を煩はした。

一 奥附検印は著者が生前愛用したものである。

一九四九年六月

(藤島敏男)

序

大儒狄生徂徠の『峽中紀行』を、一に風流使者記と云ふ。「風流使者」の語は、是より出づ。その風流は、俳諧師が謂ふ所の、風流とは、同じからざるが如しと雖も、風流に二致なし、苟くも花鳥に心を勞し、風月を友とする者にして、安く峻峭の高山、浩蕩たる大河に、心魂を撼かさざらん哉。抑も風流とは何ぞ。極意を言はば、身も心も擧げて、自然に放下するの謂に非ずや。素より、行藏は人に依りて、異なるものありと雖も、風流の道は、古來多く、旅を以て貫かるゝものと爲すが如し。俳聖芭蕉は、漂泊の志止まずといひ、明治の詩人北村透谷は、飄遊は我が性なりといひ、純一生活の唱道者吉江孤雁は、旅を求むる心は、新しき國を求むる心にして、新しき境地に立ち、新しき自己を見出す要求なりと立言せり。故人日に遠し、何すれぞ、その遺語の切々として近く我が耳に響くや。殊に魔魅の力の恠しきまでに怖ろしき山と、山の旅とに於て自然と人間と交感牽引の強きを見る。「山谷の放浪者」の著者、柏源一郎は溪流の水音に聽いて「行け、行け、汝を遮る總てを越えて行け」と叫び、小なる人間より、大なる自然に、回歸することに依つて、測り知る可らざる幸福を見出すことを宣して、そゝり立つ藏王の峰に分け入り、永久に行衛知れざる無何有郷の

漂泊者となり了んぬ。しかも彼は、雷鳥の雛を撲殺することに堪へざる小心翼々者なることを懷へ。吾が岳友、畫人茨木猪之吉が、心の故郷穂高に登りたるまゝ、竟に不歸の客となれるや、我は「人よりも山を愛でにし君なれば山又山へ往きて歸らじ」と弔歌せり。されど、こは山の遭難者を以て、アルピニズムの殉教者なるが如くに、ひた向きに祀り上げんとする意圖に非ず、止むに止まれぬ心の要求より、悲劇の主人公となる諸ろの故人に對する一片氷心の哀歌のみ。

岩石は神に非ず、然れども「山よ、神その物なり」と、ハンス・モルゲンタアレルは讚美せり。火山は、物資としては、乾燥なる熔岩と砂礫の累積のみ。しかも「紫匂ふ夕富士を見たことがあるか、どうしてあんなに火山系の古い山體は、やさしく美しいのだらう」と大島亮吉は詠嘆せり。品格と風韻の古典美は、解放されたる近代人の心を囚へずとは、誰か言ふ。哀しきは我が風流の道なる哉。風流は寂し、風流は慘として聲なし。只だ斯の道を、實踐し遠行したる者のみに、拈華微笑を許す。昔者クリストは四十日間曠野に彷徨し、印度の古聖は家を捨て、雪山に入る。それ等は、身を以て道を求むる人々にして、宗教に於て、多くその例を見ると雖も、風流も亦美の宗教なり。歸依者は、時の古今を問はず、東洋人と西洋人とを問はざるなり。風流なる語は、元來東洋獨得のものなるが故に、之を西洋人にまで當て嵌むることは、語義的に、又思想的に、不穩當を免れざるべしと雖も、我は事實に於て、徹底風流の究極を、却つて往々歐米のアルピニストに看取することあるを奈何せん。恣に『山の風流使者』の名の下に、茲に我等に親しき岳人と、我等に縁故ある一二の西洋人收容をも敢へてしたる所以なり。彼等或は惑はむ、我が僭越を許せかし。我は印度

の聖僧タゴールの隨喜者に非ずと雖も、人間が生物として最高の位置を占むべきは、所有の力に於てに非ず、溶合の力と、調和の力に於てにあり、といふ道破に、點頭するを禁ぜざるなり。
『山の風流使者』一卷を、世に送るに當りて、言の不備を顧みず、自ら爾しかく餞す。省みて、獨善を鞭打むちたる我にも有る哉。

昭和二十三年初夏

於阿佐ヶ谷草屋

著者